

はじめに

「ほめて育てよ」と言われます。

私が小学校教師として採用された頃は、とにかく先輩から「子どもをほめなさい」「子どものよいところを見つけないさい」と言われました。子どもを伸ばすために、また、子どもとよい関係をつくるために、毎日子どものよいところを探してせつせとほめました。

しかし、私の学級の子どもが問題を起こしたときに心を開いて事情を話したのは、私ではなく、新採用指導担当のベテランの先生でした。正直言ってショックでした。その先生は、週に四時間ほどしか私の学級の授業を担当されていませんでした。あとの二十数時間の授業とその他の時間を彼らと過ごしたのは私です。それなのに、その子は私の問いかけにほとんど答えてくれなかったのです。

また、その学校には毎日鬼のような形相で子どもを「叱り飛ばす」先輩教師がいました。よその学級の子どもも、同じようなものすごい勢いで叱っていました。ときには私も叱られました。しかし、その先生は子どもからも保護者からも圧倒的に支持を受けていました。当時の私には、それがなぜなのかはどうしてもわかりませんでした。しかし、それからその先輩教師のようなやたらと子どもを叱る先生に出会いましたが、その先生方の多くが、やはり保護者や子どもにも支持されていたのです。

彼らが支持される理由は、いったい何だったのでしょうか。

「ほめて育てよ」は間違っていないのです。しかし、そうした主張が出てきた背景を、私は理解していません。つまり、それは「きっちり叱る」という前提があつたことだったのです。

私を指導してくださった新採用指導担当の先生も、先輩教師も、優れた指導力を持つ同僚も、厳しく叱る教師であるとともによくほめる教師でもありました。「ほめて育てよ」という主張は、もう少しいいいに解釈をしなくてはならなかったのです。

「これまで子どもをたくさん叱ってきました。でも、叱るだけでは子どもは伸びませんよ。もっとほめて育てましょう。ただし、叱ることを忘れてはいけませんよ」という話だったのではないのでしょうか。

ところが、最近では、「ほめて育てよ」が「叱つてはいけない」と同義のように理解されるようになってきているでしょうか。学校では、「叱れない」先生の存在が指摘されるようになりました。保護者の中にも「先生、また、叱つてしまいました」「叱つちゃダメだとわかってるんですけど、叱つちゃうんですよね」とおっしゃる方が増えました。まるで叱ることがタブーのようにとらえられる世の中になったと感ずるのは、私だけでしょうか。

そうしたほめることへの迷いが、昨今の膨大に提案される「ほめ方、叱り方」をめぐる主張のエネルギーになつていくように思います。本書も、そうしたほめ方や叱り方を示した書籍の一つでもあります。しかし、本書で言いたいことは方法論ではないのです。

子どもや保護者、同僚の教師からも支持される教師たちの共通点がもう一つあります。それは、

ほめることや叱ることにおける自分なりの哲学をしっかりと持っている

ことです。ほめることや叱ることは、ともすると子どもを自分の言いなりに操作してしまう危険性を持つ行為です。指導力のある人ほど自覚しなくてはなりません。指導者として未熟なときは、言うことを聞かせるだけで必死ですが、力量がついてくると、子どもが自分の言うことをよく聞くようになります。そこで気をつけなくてはならないのは、「子どもの支配者になってしまうこと」です。指導力が高まれば高まるほど、伝えていることの質が問われます。

みなさんのほめることや叱ることにおける哲学は何ですか。何のためにほめていますか。何のために叱っていますか。この問題は、単なる子どもとのコミュニケーションの問題にとどまりません。子どもは、ほめられた経験や叱られた経験に大きく影響を受けて成長していきます。それらの有りようによって人生観や行動を形成していく可能性があります。子どもは近未来の社会の主役ですから、この問題は世の中づくりの問題と関係していると言っていいたいでしょう。

本書は、読者のみなさんと一緒に、人を育てることに対する自分なりの考え方を見つめてみたいと思っただけで書きました。「教育とはこれからの世の中づくりである」という視点を持ってほめたり叱ったりしたら、毎日繰り返される子どもとのやりとりも一つ一つが輝きを増すのではないのでしょうか。